

山村再生研究会 第1回セミナー 開催メモ（初日：10/1（土））

日時：2011年10月1日（土）13時30分～18時45分

場所：岩手大学 滝沢演習林

参加者：山本 信次（岩手大学）、内野 雅之（同志社大学）、白井 信雄（法政大学）、平田 賢典（みずほ総合研究所(株)）、広石 拓司（(株)エンパブリック）、大石 卓史（(株)自然産業研究所）、高津 伸司（ハイライフ研究所）、熊倉 次郎（リベラルアーツ総合研究所）、佐藤 龍男（男鹿森林組合）、永井 雄人（白神山地を守る会）、宮城 吉邦（自然流工房「奥庵」）、嵯峨 創平（岐阜県立森林文化アカデミー）、鈴木 直子（住工房なお(株)）、犬塚 昌良（林野庁）、木幡 英雄（岩手県森林組合連合会）、半澤 充（岩手大学）

※以下、敬称略。

司会担当は平田。

■挨拶・開会趣旨（山本）

- ・山村再生研究会は設立発起人 25 名をもって発足した。
- ・きっかけになったのは、林野庁の山村再生関連の事業。
- ・研究会としては、今年度から取り組みを開始した。
- ・3/11、東北は震災により大きな被害を受けた。盛岡は仙台や福島に比べると被害は少なかったが、ガソリン供給の面などでは苦労が多かった。盛岡に住む方々が一息ついたのは GW 過ぎた頃である（もちろん沿岸部はまだ時間がかかる）。
- ・盛岡であれば、エネルギーにしろ、物資にしろ、自給できると思っていたが、そうではなかった。これまでのスタイルが成立しないことが明らかとなった。
- ・自由な経済活動を否定するわけではないが、利便追求型の無尽蔵な生活は長続きしないだろう。地域の資源や知恵を活かしたスタイルへの転換が必要になると考えている。
- ・現代社会においては貨幣経済のみの観点からは「農山村はお荷物的な存在」だと言われることがある。生活コストが高いという理由から。しかし、それはおかしい考えである。
- ・小さいところからではあるが、山村の良さを活かした取り組みを進めていきたい。
- ・是非、会員になってもらって、一緒に仲間としてやっていきたい。よろしく願いしたい。

■講演「森と人を活かす山村再生 ～山村マーケティング調査と取り組み事例に学ぶ」（白井）

- ・山村再生の意義、山村再生のためのマーケティングの方法、取り組み事例の紹介などを本日は行いたい。
- ・はじめに意義について。3/11 に震災が発生した。今は時代の変わり目であると感じている。原発の問題に関連して都市の脆弱性もあらわになった。時代の変わり目としては、過去にも明治維新、第 2 次世界大戦などが挙げられると思う。
- ・日本の人口は、江戸時代は 3,000 万人、終戦時は 7,000 万人、2006 年にピークである 12,774 万人と

推移した。既に時代は変わりつつあったともいえる。

- ・オイルピーク（全世界オイルの原油生産量）も 2000 年代にあるといわれている。世界的にみても転換期にあるといえる。
- ・では、時代の変わり目で何が変わったか。明治維新では産業革命が、昭和の戦後復興ではエネルギー革命（石炭から石油へ）が起こった。今回はソーシャル革命が起こっているといえる。国家や産業、都市にかわり、地域・地方や市民、山村が主導する世界になっていく必要があるのではないか。産業面でみても、構造的エコビジネス、コミュニティ・ビジネスへの転換が起こる。自然に対する姿勢もかわってきた。自然を制御する・あがなうという姿勢から、自然と折り合う、つきあう、見習うというスタイルの転換が必要である。
- ・持続可能な地域づくりについて、自分なりにまとめたいと考えている。「他者への配慮」「柔軟な適応の備え」「主体の活力」の3つが原則になるのではないか。
- ・次に山村の良さについて、確認してみたい。
- ・スライド 9 には、里山を介した循環の図を示してみた。太陽エネルギー、里山、農家、農地、畜産などの関係性をまとめている。これまでは、里山を介して、食料やエネルギーを得ていた。また、山村には資源の共有（薪の採取など）、知恵の共有の仕組みがあった。
- ・次に山村のマーケティングについて。
- ・山村サイドと消費者サイドのミスマッチを解消することが、山村マーケティングと定義している。ここでは商品を「売る方法」ではなく、商品が「売れる仕組み」という考え方が重要である。対象は一樣ではないので、ターゲティングによる絞り込みとポジショニングによる差別化も重要である。
- ・山村らしいマーケティングには「あるもの」「つながり」「わかちあい」「みえるか」「ほどほど」「まなび」の要素があるだろう。これは企業向け CSR にも通じる点がある。
- ・次に昨年度実施したアンケート調査の結果について。
- ・昨年度、都市部の住民を対象としたアンケート調査（7,200 名）を行った。
- ・山村とのかかわりを聞いたところ、半数程度は山村と何らかのかかわりがあるとの回答があった。
- ・「山村とのかかわり」と「住宅木材の利用意向」の関係性について分析を行ったところ、山村とのかかわりがあるとした回答者は、木材利用（国産材含む）の意向が高いという傾向がでた。山村とのかかわりを何らかの方法でもってもらおうことが、住宅用木材として材を供給していくことにつながる可能性があるといえる。
- ・また、山村を訪問する際のこだわりに関する回答結果を用いて、主成分分析という分析を行った。その結果、「山村らしさ」「観光・利便」という 2 軸を抽出した。また、山村を訪問している方々のうち、山村へのこだわりを持っているのは全体 5%程度、観光面でのこだわりをもっているのは全体の 5%程度という結果を得た。この「山村へのこだわりを持っている」5%程度の層を大事にすることが重要である。「山村へのこだわりを持っている」層は山村関連の産物購入の割合がやや高い、お気に入りの山村の数が多い、情報の入手媒体が多様である、新たな取り組みへの関心が高い、といった傾向もみてとれる。
- ・次に取り組み事例の紹介について。
- ・宮崎県の諸塚村のエコツアーを紹介する。村民総参加型、あるものを活かす、生業や年中行事を素材とする、という方針でツアーをされている。都市からは訪問しにくい場所にあるが、繰り返し都市住

民が訪れている。

- ・平成 9 年頃からエコツアーを開始されており、試行期、基礎づくり期、村内への展開期等を経て、自立期へと移行してきている。行政主導で立ち上げて、徐々に地域（観光協会など）に引き継いでいく方針で進められてきている。エコツアーのほかにも、カーボンオフセット住宅など、常に新しい展開を模索している点も評価できる。
- ・次に高知県の梶原町の棚田オーナー制度について。梶原町は最近では風力発電でも有名な地域である。棚田のオーナー制度は今では全国に広まっているが、農林水産省からの出向した職員が梶原ではじめて発案したものである。
- ・制度についてだが、農家とオーナーの間に行政（梶原町）が仲介役として入っている。農地利用の法改正が行われるタイミングでチャレンジを実施。総数はそれほど多くはないが、コアな層をうまく取り込んでいる。最近では定住者もでてきているようだ。
- ・次に、長野県飯田市の市民共同発電事業（おひさま進歩）について。飯田市は環境文化都市を掲げている。例えば、市内の公共施設にすべて太陽光発電を設置している。また、市民の出資により発電事業を実施している。このように多くの市民をとりこむことで、波及性の高まりが期待できる。環境教育（園児向けなど）にも積極的に取り組まれている。
- ・この飯田市の取り組みが評判をよび、長野県全域で取り組みが進んできている。
- ・また、再生エネルギーの事例として、池内タオル(株)の「風で織るタオル」、浜松の「エコメロン」を紹介したい。
- ・再生可能エネルギーを地域再生可能エネルギーにしていくことが重要である。その際に、波及性を高めるための工夫が望まれる。
- ・ほかにもケッパレ東北「はがき商品券」の取り組みは、応援メッセージの書かれたはがき商品券を東北に送り、地場産物を購入するもの。5,000 円/1 セットで 500 セット程度売れている。しかし、現在販売はストップしており、今後の展開は検討されているようだ。
- ・以上、これからの WS の参考としていただきたい。

<質疑・コメント>

- ・アンケートに関連して。こだわり交流層が交流経験の蓄積を通じて居住につながるのかどうか、という疑問がある。つながらないのであれば、何が要因になるのだろうか。そのあたりに関心があるので、次の WS で議論させてほしい。（嗟哦）
 - アンケートでは今後の居留意向（二地域居住含む）も聞いている。3 割程度の回答者は関心・意向を持っているという結果だった。ただし、買い物や移動の不便さや仕事場の確保、医療施設の整備などが課題として同時に指摘されている。（大石）
- ・以前、「OECD 先進国のうち日本以外の国では農山村への人口移動が起きている」と内山節氏がいていた。ただ、稼ぎだけで山村に住もうとすると、大変である。ヨーロッパの場合は農業が規模拡大しているので、農業ではなく、近くのマチまで働きにでていくスタイルもあると聞いている。（山本）
- ・移住のニーズはあってもノウハウがないケースが多いだらう。（内野）
- ・こだわり層の中身をさらに知りたいと感じた。（高津）
 - 現在、検証中である。ざっと見たところでは性別、年齢などでは明確な傾向はでていなかった。（白

井)

■WS

<自己紹介>

- ・氏名・所属とあわせて、山村再生のポイント、山村再生の課題について、各参加者が発表。

<進め方（広石）>

- ・山村再生のポイント、山村再生の課題（山村再生でここはどうなの？）の意見を広石が分類。
- ・そして、重点検討テーマとして、以下の3点を選定。選定したテーマを3班に割り振り、20分×2セットでアイデアだし&とりまとめを実施。
 - 1：山村再生が実現したい姿とは（内野班）
 - 2：これからの山村の暮らしとムラを支える仕事（山本班）
 - 3：都市と山村をどうつなぐのか（白井班）

<結果>

※次ページ以降のスライド参照

スライド 1

山村再生研究会 第1回セミナー

1

WSメモ

2011/10/1

スライド 2

山村再生のポイント

2

- 多様な基盤をもつ、大きな変化に対応する【環境】
- 都市とのつながり【都市】
- 山村での仕事をつくる【仕事】
- 文化・コモンズの大切さ【文化】
- リーダー・コーディネーター・人づくり【人材】
- 新しい仕組みづくり、ノウハウ【仕組み】

スライド 3

山村再生でここはどうなの？

3

- 都市とつながる【都市】
- 儲ける【経済】
- 合意形成【山村をまとめる】
- 「森とひと」「山村再生」は共有できているのか【意義付け】

スライド 4

3つの厳選テーマ 4

- 1:山村再生が実現したい姿とは(内野班)
- 2:これからの山村の暮らしとムラを支える仕事(山本班)
- 3:都市と山村をどうつなぐのか(白井班)

*** 20分 × 2セットでアイデアだし!**

1セット目 ~17:40
2セット目 ~18:00

スライド 5

1:山村再生が実現したい姿とは(内野班) 5

■ポイント

- 山村振興(「経済」)⇒ 山村再生へ(＋「環境」「文化」)
- 生活基盤を支える体制を取り戻す／作り直す
- コミュニティの豊かさを取り戻す(※安心・信用が源泉)

■コメント

- 都市とは違う良さを誰に、どう伝えるのか?(嵯峨)
- 伝え方の研究が必要。関係者毎にキーメッセージも違う(平田)
- 都市とは違う選択肢・可能性があることを示すことが重要(山本)
- 都市は企業的な文化社会、山村はそれとは違う良さがあるはず(広石)
- 「昔に戻る」よりも「創る」というイメージ(白井)

スライド 6

2:これからの山村の暮らしとムラを支える仕事(山本班) 6

■ポイント

- 外の仕事(現金収入元)が不安定化 ⇒ 地域の生活基盤を活かした仕事への回帰
- 新しいことに現場でチャレンジする人には女性が多い ⇒ 小さな仕事づくりの広がり
- 定年後の男性の活躍の場も重要
- 適切な役割分担、空振りをさせない戦略性・コーディネート
- これまでの林業労働では、安定化・通年雇用を目指していたが、今後は季節雇用を志向する動きも
- 多様な仕事を持つことが損にならない社会づくり
- ムラでの製品加工はすべて自ら行うのではなく、近場のマチとの連携も有り
- 小さなビジネスのための製品開発を検討するためのアンテナがない

スライド 7

2:これからの山村の暮らしとムラを支える仕事(山本班)	7
■コメント	
■主婦が地元で働くことができる職場づくりを行っている地域もある(白井)	
■各県のアンテナショップはもうちょっと何とかしてほしい。残念。バイヤーがチェックしにくるような場にならないと(内野)	
■60代~70代の活躍の場づくりを(佐藤)	
■団塊の世代で定年後Uターンして戻ってきた方々は、居住地付近でのボランティア活動へのニーズが高い。その受け皿づくりを。一方、若手の人材の活用も大切(嵯峨)	
■ただ単に若手を放り込んで上手くいかない。必要なスキル・ルールを教えるべき(山本)	
■責任を持って取り組みをすべき(高ストレスだけれども)(平田)	
■遠方の都市だけではなく、近隣で如何にして売るか(1つだけに依存するとリスク高い)(広石)	

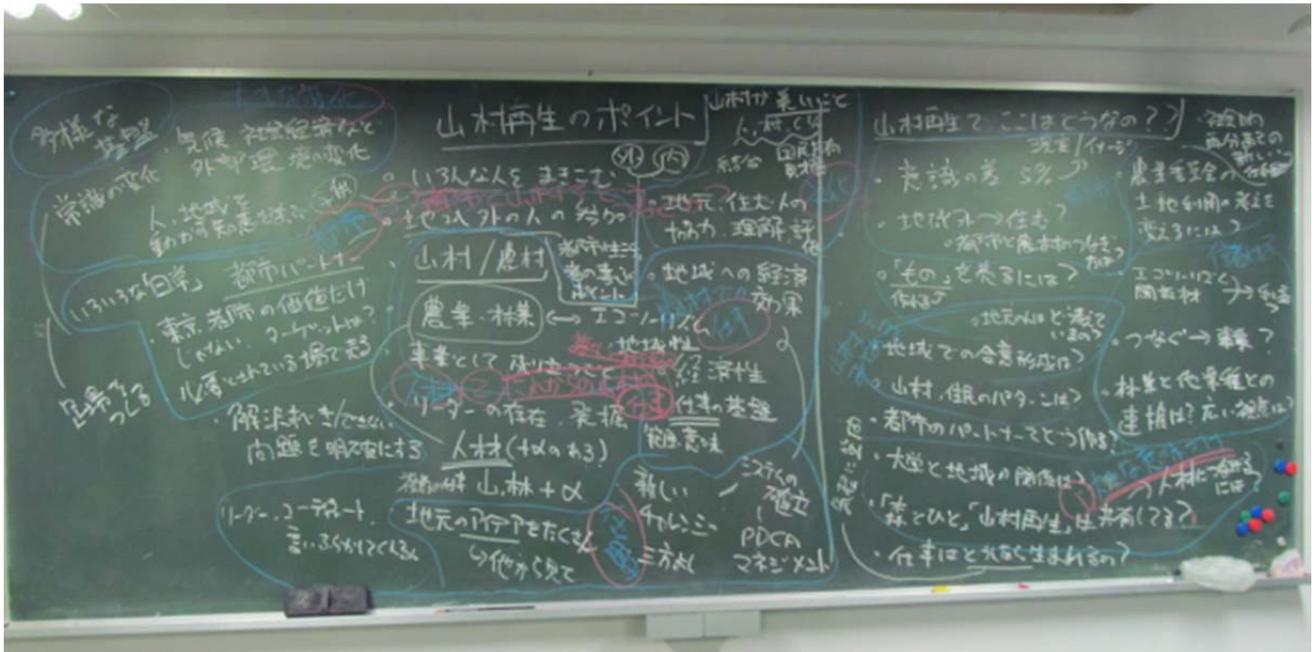
スライド 8

3:都市と山村をどうつなぐのか(白井班)	8
■ポイント	
■誰とつながるか、異業種のつながりを重視してはどうか(例:音楽⇔林業)	
■山村と都市のコーディネーター同士がつながることの必要性	
■つながりをプロデュース・デザインする、山村の良さを伝える人材の必要性	
■コーディネート、プロデュース・デザインを行う方の責任感	
■キーメッセージを打ち出す(訴求力のあるものを)	
■姉妹小学校制度でつながりづくり(大人になっても継続)	
■オーナー制度:金銭のみだけではなく、労働でのつながりづくりも有り	
■訪問できないときでもつながるための工夫	
■山村民制度、みんなの山村(アイデアだし)	

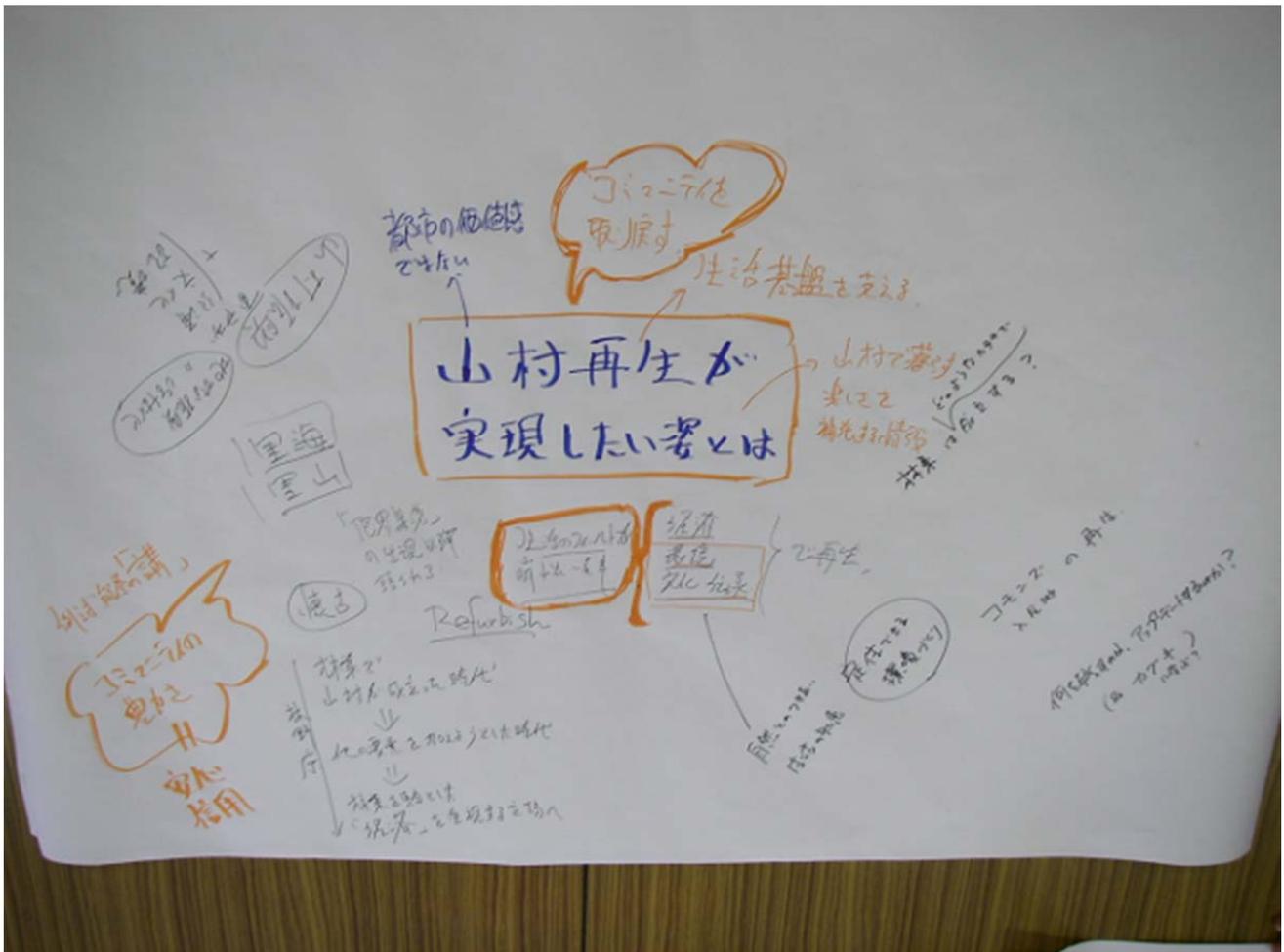
スライド 9

3:都市と山村をどうつなぐのか(白井班)	9
■コメント	
■ふるさと納税制度:1回限りになってしまっている⇒継続性を高める工夫を(交流事業をされている方に有効に活用してもらう)(山本)	
■コーディネーター、プロデューサーが増えないと。彼らを認める・高く評価する仕組みづくりを(永井)	
■山村コーディネーターのような制度があれば。村役場が任命?(白井)	
■誰が評価・認定するかまで考えてからしないとイケない(平田)	
■関係者が共有できるような環境作りを(広石)	

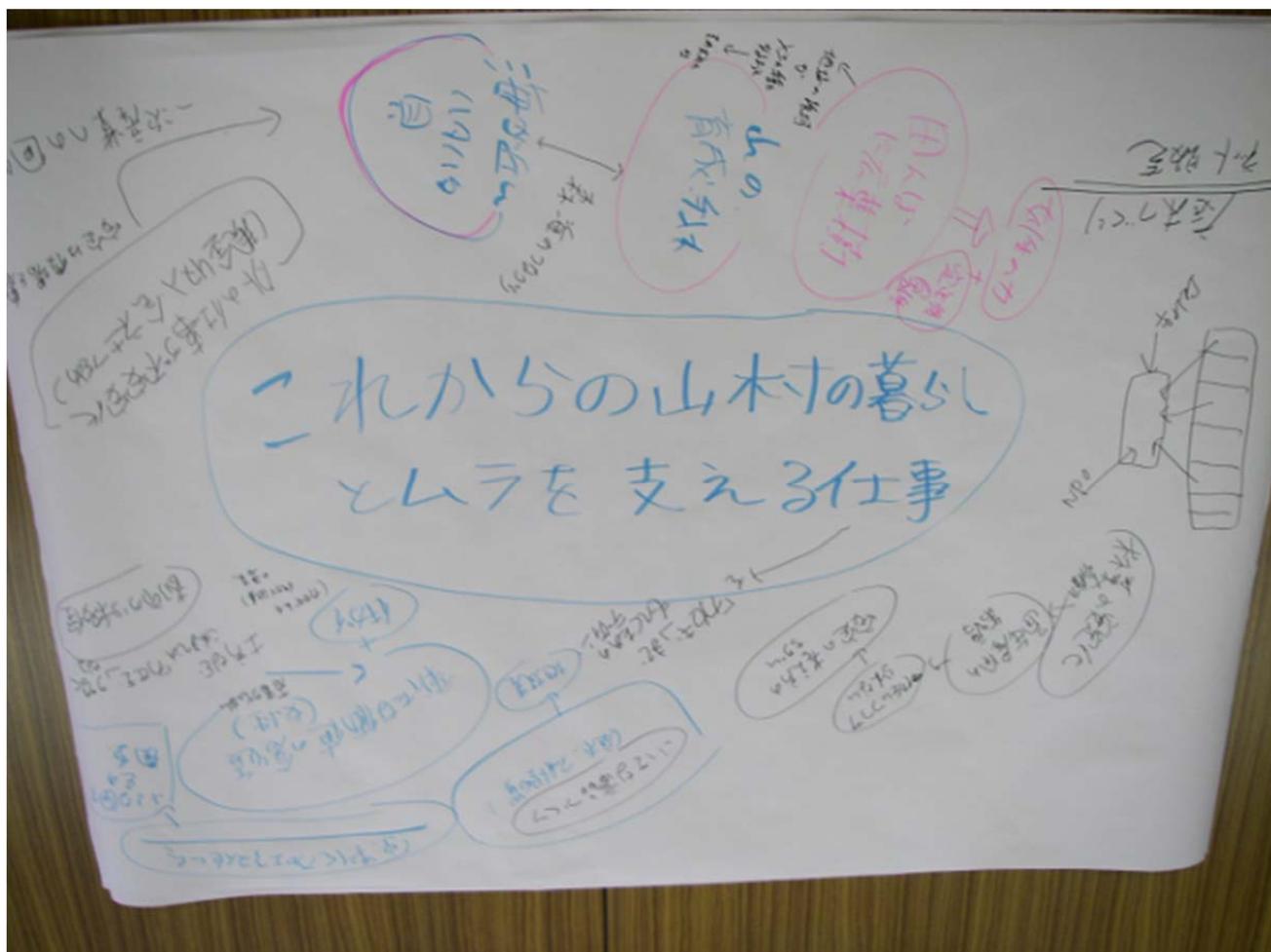
山村再生のポイント、山村再生の課題（山村再生でここはどうなの？）の意見



テーマ1 模造紙



テーマ2 模造紙



山村再生研究会 第1回セミナー 開催メモ (2日目: 10/2 (日))

日時: 2011年10月2日(日) 8時55分~11時45分

場所: 岩手大学 滝沢演習林

参加者: 山本 信次 (岩手大学)、内野 雅之 (同志社大学)、白井 信雄 (法政大学)、平田 賢典 (みずほ総合研究所(株))、広石 拓司 ((株)エンパブリック)、大石 卓史 ((株)自然産業研究所)、高津 伸司 (ハイライフ研究所)、熊倉 次郎 (リベラルアーツ総合研究所)、佐藤 龍男 (男鹿森林組合)、宮城 吉邦 (自然流工房「奥庵」)、嵯峨 創平 (岐阜県立森林文化アカデミー)、鈴木 直子 (住工房なお(株))、犬塚 昌良 (林野庁)、木幡 英雄 (岩手県森林組合連合会)、半澤 充 (岩手大学)

※以下、敬称略。

司会担当は平田。

■講演「地域性を踏まえた森林管理とその利用」(山本)

- ・ 森を守るべきという認識は多くの方がもっているだろうが、何を指すべきだろうか。
- ・ 正しい森のカタチというものは各地域それぞれである。決して一様ではない。
- ・ 何が正しいかは状況によって異なる。それよりも、誰がどう決めるかの方が大切である。
- ・ そのためには、まず自分たちを取り巻いている森林や自然の姿をしっかりと知ることが大切である (例えば気候や歴史など)。
- ・ 今回のセミナーの会場である岩手大・滝沢演習林 (滝沢村) はアクセスが良い場所に立地しており、日本でも有数の利用度を誇る演習林である。岩手大にはもう1つ、雫石町にも演習林がある。両者は20km程度しか離れていないが、滝沢演習林は北上山地、雫石の演習林は奥羽山系に属しているので、植生をはじめとして状況が異なる面が多い。そのため、岩手大ではこのように2つの場所に演習林を設置している。これによって、北東北の森林に関する研究・検証を的確に行うことを可能としている。
- ・ 岩手県は奥羽山系と北上山地でもって、4つのブロックに分けることができる。
- ・ 奥羽山系は雪が多く、その東側の盛岡付近は雪が少ない。ただ、寒いのは雪が少ない盛岡付近の方である。実は雪が多い方が寒くない。そのため、奥羽山系では、雪の中の暖かい環境の中で育ってきた植物 (低木) が見られる (ハイイヌガヤ、ヒメアオキなど)。北上山地は奥羽山系ほど積雪量が多くななく、これらの植物はあまり見られない。このように自然環境 (積雪量) の違いによって、見られる樹種にも違いがでてくる。
- ・ 土地利用の面でも違いがある。奥羽山系は温泉地が多いことからわかるように、造山活動が活発で、比較的新しい山々からなる。それに対して、北上山地は古い。山は時間が経つにつれて、頂上部が削りとられ、山の上が平らになってくる。北上山地では、この標高の高い平らな台地を利用して、岩手短角牛の放牧を行っている。このように人の手が入っているので、ノシバの草原になっている。一方、奥羽山系ではブナなどの原生自然がみられる。
- ・ また、北上山地付近は、夏場にヤマセの影響を受ける。そのため、米がづくりにくく、雑穀の栽培が

行われてきた。また、森の中で焼き畑も盛んに行われてきた。さらには製塩（入り浜式塩田）や製鉄の原料として薪供給を行う役割も担ってきた。このように、北上山地では、長い間、森や木が様々な用途で使われてきた。人と自然が折り合いをうまくつけてきた地域であるといえる。また、北上山地はイヌワシの生息地としても有名である。羽をひろげると 2m 近くにもなる猛禽類だが、原生林ではなく、人の手がいった草原が広がっていたため、生息地になったといわれている。なお、最近では森の利用度が落ちたため、現在が最も森林率が高い状況にあるといえる。

- ・西日本と東日本（東北）の違いについても少しふれておきたい。西日本の暮らしは稲作と、また、東日本（東北）の暮らしは森や雑穀との関係が深い。どちらが良いということではないが、そのような違いがある。森についてだが、常葉広葉樹よりも落葉広葉樹の森の方が、森に依拠して暮らしやすい。食べるものも多く、雪が降るので狩りがしやすかったり、木を運びやすかったりもする。
- ・人の営みと自然生態系、この 2 つをあわせて「風土」と呼ぶ。思い込みでもって事を進めるのではなく、まずこの「風土」を理解してから、今後の展開について議論をする、そして事を進めるということが大事である。

※その後演習林内を散策しつつ、里山での森林の活用方法や岩手大学での取り組み、各樹木の特徴などについて解説。

以 上